

## 二宮尊徳の思想

—大原幽学との比較を中心にして—

姚 奇 志

### A Comparative Analysis of the Thoughts of Later Farmer Thinkers

—Ninomiya Sontoku and Ohara Yugaku—

YAO Qizhi

#### Abstract

This article makes a comparative analysis of the thoughts of later farmer thinkers Ninomiya Sontoku and Ohara Yugaku, which both emphasized a philosophy of obeying social status system during the Age of Edo. Ohara Yugaku adhered to his idea of harmony between man and nature, in which exceedingly emphasized the feudal status system from the standpoints of warriors and political point of view, and consequently, his thinking could not surmount the limitation of the warrior ethics of feudalism. Meanwhile, Ninomiya Sontoku tried to distinguish the human laws from the natural laws, and regarded subjective initiative of human beings based on following the natural laws, in which demonstrated his strong concern over the farmers' interests from a practical point. Also, Ninomiya Sontoku advocated the coordinated development of both morality and economy, which was characterized by stressing social public welfare and social coordination. In comparison, Ninomiya Sontoku's thought conformed to the historical trend and built up positive practical significance.

キーワード：二宮尊徳、大原幽学、思想、比較

**Key words:** Ninomiya Sontoku, Ohara Yugaku, thinking, comparison

## はじめに

日本近世の倫理思想を考える上で、二宮尊徳の思想は非常にユニークな一つの実例であるが、争議を持つ課題でもある。先行研究を整理し、主に二種類の観点がみられる。一つは、「封建的支配機構を肯定」<sup>1)</sup>したので、彼は「御用思想家」に、彼の思想は「折衷思想」に位置付けられている。家永三郎<sup>2)</sup>、山中浩之<sup>3)</sup>、見城悌治<sup>4)</sup>等の研究者らは大体この見方である；もう一つは、二宮尊徳の思想の独自性を強調している。奈良本辰也<sup>5)</sup>、安丸良夫<sup>6)</sup>、渡辺武<sup>7)</sup>、下程勇吉<sup>8)</sup>等の研究者らは大体この見方である。『二宮尊徳翁全集』<sup>9)</sup>を読み直し、筆者はほぼ後者の見方に賛成する。二宮尊徳の思想は一体どんな特質を持つか、本稿は比較的研究方法を用い、彼の思想を検討したい。

大原幽学（1797～1858年）は二宮尊徳（1787～1856）とほぼ同時代の思想家である。両者は多くの相似点を持っている。同じ時代背景のもとで、同じ儒教思想を吸収し、それをもって、幕末の農村秩序の再建を解決しようとして、それぞれ独自の思想を打ち立て、しかも、実践を行ったが、その効果と結末はかなり違っていた。関係文献において、両者は類似の思想家として捉えられていたのである。例えば、二宮尊徳・大原幽学（集）という殆んど同じ書名の二冊の異なった本が、それぞれ異なった全集の一卷として、異なった校註者により、異なった発行所から出版された。その一つは1966年2月20日に玉川大学出版部から、世界教育宝典、日本教育編第8巻として発行された、下程勇吉・九木幸男両氏の校註になる「二宮尊徳・大原幽学集」であり、もう一つは1973年5月30日に岩波書店から日本思想大系第52巻として発行された、奈良本辰也・中井信彦両氏の校註になる「二宮尊徳・大原幽学」である。また、村落史研究者の木村礎は『近世の村』の第5章、「村の生活」の「村の知識人」の中で、村落史の視点から二宮尊徳と大原幽学に関する比較研究の重要性を指摘している。<sup>10)</sup>この指摘は現在もなお意義があると思う。

従来諸研究においては、両者を取り上げた比較研究の論文としては、主にア土屋重隆の「二宮尊徳と大原幽学」<sup>11)</sup>、イ門間敏幸の「日本における農村貧困克服の先駆的試み—世界に誇れる大原幽学・二宮尊徳の挑戦—」<sup>12)</sup>、ウ森静朗の「アジア的信用組合の成立——大原幽学と二宮尊徳」<sup>13)</sup>などがある。以上の論文は両者の思想の内部にまで立ち入らず、主に経済面または実践面の考察である。先行研究を踏まえながら、両者の思想の比較を通じ、二宮尊徳の思想を検討する、この一文の試みである。

### 一 二宮尊徳の主な思想

二宮尊徳の思想は主に「天道人道論」、「勤儉」、「分度」、「推譲」などといった哲学と倫理の知恵からなっている。その中で、「天道人道論」は二宮尊徳の思想の根幹をなすものであり、その内容は主に次のようである。

宇宙の運行規律は「天道」と「人道」という二通りに分かれていると尊徳は考えている。彼

によれば、「天」とは大自然のことであり、「天の道」、「天道」は自然循環の営みそのものであり、そこには永久に変わらぬ「天」の道理がある。これに対して、「人道」とは人各々が行動する、多様で変化しがちな「作為の道」であるという。尊徳は次のように述べている。

天に従ふを自然と為す、之れを名づけて天道といふ。人を以て作事を為す、之れを名づけて人道といふ。人道は田畑を開き、天道は田畠を廃す、人道は五穀を植ゑ、天道は生育を為す。天道は自然に為り、人道は作事に為り、天道は人道と和し、百穀實法を結ぶ。<sup>14</sup>

ここで、尊徳は「天道」と「人道」を区別して考えているのである。「天道」は自然であり、「人道」は作為である。自然の法則が田畑を荒らしていくことに対して、「人道」は必ずこれを防衛せねばならず、あくまでも田畑を作っていくのである。従って、時には自然に対する人間の戦いともなるのである。尊徳は言う。

天理（中略）、稻と莠と区別せず、種のあるものは皆生育させ、生氣のあるものは、皆発生させる。人道は天理に従って立てたものであるが、其内に種々と区別をして、稗や莠を悪いものとし、稻や麦を善いとする如き、皆人間に便利なる物を善とし、不便なる物を悪とする。<sup>15</sup>

つまり、「天道」は客観的なものであり、「天道」には善悪の差別はない。それに対して、「人道」は主観的なものであり、「人道」には善悪の差別があるという。<sup>16</sup>また、「人道は一日怠れば忽ちに廃す、人道は勤るを以て尊し」<sup>17</sup>と尊徳は強調したのである。しかし、「人道」はあくまでも「天道」の下での作為であり、「人道」を徹底するということは、「天道」を無視することではない。「天道」と「人道」との関係については、尊徳は水車にたとえて次のように述べている。

夫人道は譬ば、水車の如し。其形半分は水流に順ひ、半分は水流に逆ふて輪廻す。丸に水中に入れば廻らずして流るべし。又水を離るれば廻る事あるべからず。（略）水車の中庸は、宜き程に水中に入て、半分は水に順ひ、半分は流水に逆昇りて、運轉滞らざるにあり。人の道もその如く天理に順ひて種を蒔き、天理に逆ふて草を取り、欲に随て家業を励み、欲を制して義務を思ふべきなり。<sup>18</sup>

ここで、尊徳の考えている「人道」は「天道」との「宜しき程」の関係を持つべきものである。彼は半ば「天道」に順いながら、半ば逆らうというあり方を「人道」のあるべき姿としている。ここからも、人間と自然とは調和して発展していくという尊徳の主張が読み取れる。

ところで、一体、どのように「人道」を歩んでいくべきであろうか？尊徳は「勤儉」の上で、「推譲」と「分度」という二つの概念を提出した。「勤儉」というものは理解しやすいものである。具体的「推譲」と「分度」というのは、どんな意味であろうか。尊徳の考えでは、人間が

この世に生命をうけ生き続けられるのは「天地人三才」の恩恵によるものであり、当然の恩返しとして人それぞれが自らの徳行によってそれらの恩義に報いるべきであり、即ち「以德報徳」というのである。尊徳の「報徳訓」<sup>19</sup>に述べたように、

父母の根元は天地の令命にあり	身体の根元は父母の生育にあり
子孫の相続は夫婦の丹精にあり	父母の富貴は祖先の勤功にあり
我が身の富貴は父母の積善にあり	子孫の富貴は自己の勤労にあり
身命の長養は衣食住の三にあり	衣食住の三は田畑山林にあり
田畑山林は人民の勤耕にあり	今年の衣食は昨年の産業にあり
来年の衣食は今年の艱難にあり	年々歳々報徳を忘るべからず

つまり、父母の生育がなければ、自分は生まれない。先祖の勤勉がなければ、家運の繁栄もない。それゆえ、人が年々歳々報徳を忘れず、勤儉して他人を助け、自分の余分を他人に「推譲」し、村に「推譲」し、国に「推譲」し、「道徳的経済的」な暮らしを過ごすべきであるという。尊徳の言う「譲」は今日のものを明日に譲り、今年のを来年に譲り、その上子孫に譲り、他人に譲るというような延長継続の行為を意味している。生活の中で余った「分」を家族や子孫のために蓄えた場合は「自譲」と言い、他人や社会のために譲った場合は「他譲」という。尊徳の考えでは、「推譲」は人道の極みである。「推譲」は譲渡であると同時に蓄積でもある。蓄積があって始めて人間の生活が安定するのだ。更に言えば、「推譲」という関係の成立こそ、人と動物を分かち所以でもあった。即ち、動物は今日の収穫を明日に蓄積しようとせず、手から口へのものである。しかし、人間は田畑を買い、家を作り、倉を立て、子孫に譲ることを知っている。また村里のために労働を提供し、国家のために収穫物を差し出す。その譲る行為において、人間社会が成立したという。<sup>20</sup>しかし、譲る部分は少なすぎると、強欲になるおそれがあり、多く譲れば、自分の生活が成り立たないおそれがある。これらを防ぐためには、「分度」という手段が必要となってくるのである。尊徳は「分度」という原則を提出した。

いわゆる「分度」は、簡単に言えば、「分守り度立て」のことである。尊徳の言う「分度」の「分」とは「天分」であり、「度」とは「用度」である。具体的に言うと、「分」とは現在自分の置かれている財力・地位・健康等の状況のことであり、主に生産力や経済能力から言うのである。尊徳の考えでは、人間は自己の分限・収入に応じ、支出に限度を設け、その範囲内で生活をし、そこに余剰のある生活を営むべきである。その生活基準の設定を「分度」という。「分度」は貧富を問わず、貴賤を問わず、皆必要とされるという。<sup>21</sup>「分度」の「度」は数カ年の平均収入によって立てられ、少なくとも、過去10年以上の収入を平均して、その範囲内で「分内」(「度」)とし、それ以上の収入を「分外」とする。<sup>22</sup>「分度」が決められると、「推譲」の量も分かる。普通には、家産の半分ぐらいを「推譲」すればよいという<sup>23</sup>。日常生活の中で、本当に「分度」という原則を守ったかというのは、本当に「他譲」まで達成しているかということによるものである。一般的意義上の「分守り度立て」が不完全な「分度」であり、「他譲」まで至らねば、「分度」は成立したとは言えない。「他譲」までこそ、「分度」が本当に成立し

たという。<sup>24</sup>

生まれつきとして、人間は勤勉に労働し、「天地人」の恩徳に報いるべきであり、そして、社会は「推譲」によって成立するという尊徳の考え方であることに対して、幽学はどんな考え方なのであろうか。次に、幽学の思想を見てみよう。

## 二 大原幽学の主な思想

大原幽学の思想は主に「人心道心説」、「分相應」、「孝行」、「家永続」といった倫理の内容である。その中で、「人心道心説」は幽学の思想の基本であると言われている。その内容は主に次のようである。

幽学は「亦天地の道といへば、人道は自ら其中に備りて有る也。是天地人の三自ら渡り合て、以て道たる也」<sup>25</sup>と述べ、「天地の道」と「人道」とは区別はないと考えている。<sup>26</sup>世間のあらゆる人間、賢明なものも愚者も、「人心」と「道心」とを交えて持っているという。「人心」、「道心」とは何であらうか。幽学はその代表著作の『幽玄微味考』の中に次のように述べている。

不<sub>レ</sub>偏は道心也。偏は人心也。

また云、人心とは、暑いとか寒いとか唯自分の身而已思ふをいふ。其せまき志故、寒いを愁ひて或は飲酒衣服をほしい俛にし、終に其樂を樂とする事に至り、知らず奢り生じて微禄するの類ひ也。或は窮するを悲み、其利を利とし、吝嗇・強欲専らと成り、終に禍ひを招く等ひ、挙て数ふべからず。是人心は危き者也。

道心とは、人を道く為めに己が身を思ふいとま無く、暑き時は人も暑からむと思ひ、寒き時は人も寒からむことを思ひ、身を慎み人を憐むの志故、自然と家も斉ひ慶も来る。然ども寒きを暖と思ふ所以無し。貧賤を富貴と思ふ所以無し。故に人心の危きと道心の微れ安きと、其心の運びを考へ是を治むる所以を心得ざるは、実に危し。<sup>27</sup>

つまり「人心」は自分のみ考える「人欲」であり、「道心」は他人のみ考える「天理」である。通常には、寒いことを暖かいことと思う所以もなく、貧賤を富貴と思う所以もないが故に、「人心の危きと道心の微れ安き」ということになるのである。従って、その心の運びをよく考え、心得、「人心」（人欲）を捨てさり、「道心」（天理）を残すべきであると幽学は主張している。「人心」と「道心」はどのように起こるか、幽学は次のように説明している。

故に虽<sub>二</sub>上智<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>無<sub>二</sub>人心<sub>一</sub>と謂へり。是上智より下愚に至る迄、人心と道心とは相混じて有る者也。故に道心の人に対する時は、下愚といへども道心自ら見る。亦道心の微れたる人に対する時は、下愚は愈道心微れ、人心知らず人欲の私と成て、貪欲非義非道を行ふ事、危し。<sup>28</sup>

即ち、世間の賢明なものより愚者に至るまで、一切人間の心に「人心」と「道心」とは混合している。故に、心の大部分を「道心」が占めている人に接していれば、愚者でも自然と「道心」

が起り、その反対に「道心」がほんの少量しか無い人に接していれば、愚者は益々「道心」を失い、私欲に傾く「人心」が限りなく広がり、遂に人欲の奴となり、貪欲、不義、非道のことをやってしまうように至るので、非常に注意せねば、大変な結果に陥るのである。「道心」が起るか、「人心」が起るかは、専ら日常に接する人の如何によって決するのである。己の心の穢れを清らかにし、常に「道心」にしようとする人は、常に「道心」の強い人に接するべきである。「道心」の強い人は自発的に「分相應」の要領を体得し、「分相應」の暮らしをし、親に孝養を尽くし、恪勤精励、勤儉貯蓄に努め、子孫繁栄、「家永続」が達成できるという。この「家永続」という目標は武士の目標であるが、幽学は普通の庶民でも、武士のように「家名」を守り、「家永続」するように努力すべきだと強調している。では、幽学の言う「分相應」とは、何であろうか。幽学によると、

分相應といふは、天子より庶人に至るまで其位に準て定まる服有り。分に応ぜぬは必礼にあらずと知るべし。又分不相應の服を着たると、或は分不相應の言葉を遣ふと、或は服と言葉遣ひと相具せざるは甚だ見悪きこと、人の知る所也。然れば敬讓も礼も言葉づかいも、分不相應は却て無礼也。<sup>29</sup>

というのである。つまり、「分相應」とは、身分に相應する服を着、言葉を使い、礼儀を知ることであるという。どのように「分相應」に達するか、幽学は次のように述べている。

父母を楽しましむる事を広く大ひにせむと志におゐては、其相應に孝道を勤むるを樂とする朋友日々に増して、語り合ふ事も皆父母の悦ぶを樂とすることに至る。斯くの如く人も立ち身も立ち、互ひに孝事而已語ふに至ては、其君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友の交に至る迄、分相應・器量相應の礼自ら立つ者也。<sup>30</sup>

即ち君臣、父子、夫婦、兄弟、友達の間では、「父母の悦ぶを樂とする」話題のみを話し合うという「孝行」に至れば、「分相應」も自然と達するものであるという。ここで幽学は「孝行」と「分相應」とをほぼ同じレベルにしている。どのように幽学の言う「孝行」を理解しようか。簡単に言えば、父母を喜ばせるのは「孝行」であるという。ただし、幽学の「孝」に対する理解は独自のものがある。自分の父母のみに孝を尽くすのが不完全な「孝行」であり、私欲の体現であると、幽学は強調していた。故に、他人の父母にも、常に孝を尽くさねばならないし、人の家も我家の如く、着実に大切に思いあうべきなのであるという。<sup>31</sup>幽学の言う「孝行」を普通の意味の孝行と比べて見れば、異なった点が二つあると思っている。その一つは「孝行」が君臣・父子・夫婦・兄弟のところ止まるのみならず、友達のところにも至るべきであり、もう一つは「孝行」が本世代に止まるのみならず、三世の後を渡るべきである。以上の二つの条件が揃わねば、「家永続」は難しいことになる。幽学は言う。

必先ず孝行を専らとし、聊も私無く、朝夕箸の上下にも親先祖を忘れず、且三世の後に

弥らざる事無く能勤め能守る也。是を身聞て育つ者は心焉に有る故、少しの教にも行ひを勤むる力を得て、三世の後を見渡すの心広きに至り、則奢りの生ずる事鮮なく自ら家名有ち安し。<sup>32</sup>

なぜ、このようにすべきであろうか、幽学の理由は「徳は人の心に執ては我一人思ひ作すにあらず、衆人をして思ひ作す所以也」<sup>33</sup>というのである。つまり「孝行」、「分相応」の達成は個人によるものではなく、全体の環境と衆人の努力によるものからである。「孝行」が君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友のところに至り、三世の後を見渡し、自然と「家永続」になるというのである。

以上、見てきたように、幽学の思想は主に「分相応」「孝行」といった道德の要求が強調され、道德面の内容が体现されている。尊徳の思想と比べ、相違が存在している。次に両者の思想を比較し、その相違を見出そう。

### 三 両者の比較

#### 1) 「天道」「人道」に関する認識が異なる

幽学は「天地の道」と「人道」とを区別なしに考えている。それはやはり儒家の「天人合一」思想の継承であると見るべきであろう。そして、幽学は常に私欲を去ると言い、「道心」（天理）の絶対性を強調しすぎ、徹底的に私欲を否定した。それは人間の欲求への制限を強調しすぎ、近代的自我意識の形成へのある程度の抑制であると思われる。

幽学と違って、尊徳は「天道」と「人道」とを区別に考えている。半ば「天道」に順いながら、半ば逆らうというあり方を「人道」のあるべき姿として、「欲に随て家業を励み、欲を制して義務を思ふべきなり」<sup>34</sup>という。自然の客観性を主張する同時に、人間の主観的能動性をも強調した。これは「天人合一」思想の突破であると言えるであろう。前に触れたように、尊徳の考えでは、「天道」は自然の法則であり、永久に変わらず、善悪の差別がないというのに対して、「人道」は人の法則であり、善悪の差別があり、自然の法則に従う同時に、自然を能動的に改造することができる。ゆえに、人間は絶えず自分の「勤」によって生活していくべきだと主張している。

尊徳は物事の相対性を強調し、「人道」は絶対的なものではないという。彼は「男なければ女なし、女なければ男なし」<sup>35</sup>とか「君外無臣、臣外無君、合君臣為一人」<sup>36</sup>というようなことを言っている。朱子学のような君臣や男女の絶対的關係というものが、尊徳の思想にはないのである。

また幽学の消極的に禁欲を強調するのと違って、尊徳はより深く人間と自然の関係を指摘し、人間の主観的能動性と正当な欲望を肯定した。尊徳は禁欲主義を否定し、私欲があつてこそ人間が勤勉に働き、自分の衣食住を充足させると考えている。百姓は私欲があり、聖人は私欲がないというのは普通の考え方であるが、実は聖人も私欲があり、そしてそれは「大欲」であると尊徳は言う。その「大欲」とは、一人のためのみならず、万民の衣食住を充足させ、大福を与え、社会の幸福を増進するという「欲」でもある。<sup>37</sup>

2) 両者も勤儉を提唱していたが、度合いが異なる。

尊徳は「分度」「推譲」を主張する同時に、明確に「勤儉」を前提とする。<sup>38</sup>「二宮翁夜話」の中に、明確な論述がある。尊徳の考えでは、勤労は人間の生存の基本条件であるという。勤労をせねば、労働所得がない。労働所得がなければ、最終の目標とする「推譲」の可能性はない。従って、勤労によって、「推譲」が可能になる。しかし、勤労しても、儉約をせねば、「推譲」も難しい。「勤儉」してこそ、「推譲」は可能となる。農民教化の実践の中で、幽学も勤儉を主張したと言われている。ただし、幽学の主な著書の中に、勤儉に関する、明確な、詳しい論述がまだ見あたらない。

3) 両者の立場が異なる。

幽学は武士の出であるから、武士階級の道德規範の烙印が明らかである。彼は幕藩体制の擁護者として、武士を理想化している。彼の思想は封建武士の道德に近いものであると思われる。彼の代表作の『幽玄微味考』の内容からこの点が窺われる。また『幽玄微味考』の中に、「庶人」と「下愚」とは通用されている。この「下愚」という言葉の語義はいうまでもなく、甚だ愚かな者という意味である。「庶人」イコール「下愚」という考え方は幽学の愚民観のあらわれであると思われる。

これに対して、尊徳は封建身分制を超越したような見方を持ち、「君民一体」<sup>39</sup>を強調していたのである。尊徳は全民の角度から、「分度」「推譲」を提唱し、領主階級と農民が共に「分度」を守るように主張している。そして、その「分度」は先ず農民に要求するのではなく、支配者としての領主階級に「度を立て分を守る」ように強調していたのである。尊徳の「分度」「推譲」の目指す対象は単に個人或は一家のみならず、家族、村、国乃至社会に至り、尊徳の目標は「家の復興」、この「家の復興」は単に「一家の復興」のみならず、「万民の復興」、「万家の復興」である。

4) 道德、経済に対する認識が異なり、体现される社会公益性も異なる

幽学の「分相応」「孝行」「家永続」という思想は完全に道德面のものであり、経済面のものに殆んど触れていないのである。幽学によれば、「孝」があってこそ家があり、「家の和」ができてこそ「家永続」が達成できるという。幽学のいう「孝行」は、普通の親子よりの「孝行」と違い、どちらかという、その本質は愛よりの責任であり、人間が一生を尽くして果たすべき義務である。そして、幽学のいう「家」とは、必ずしも血縁関係があるのではなく、一つの友愛の共同体と似ている。この共同体の中で共同連帯の精神が重視される。即ち共同体のメンバーの「道友」たちにとって、「孝」を尽くす必要がある対象は自分の父母のみならず、他人の父母にも同じように、孝を尽くすべきであり、他人の子供にも愛を与えるべきであるという。

勿論、幽学の主張する「孝行」と「家永続」は広い意味を持っているが、尊徳の主張する「分度」「推譲」と比べ、まだより広い社会的な面に広がっていない。一方、尊徳の「分度」は日常生活の経済的尺度でもあり、経済的手段でもある。しかし、「分度」は単に完全な経済的手段ではなく、伝統的な道德理念とも結び付いている。「推譲」は人間の最高目標であるという<sup>40</sup>。



「分度」の最終的な目標は「推譲」である。ゆえに、「分度」は日常生活と生産活動の中に道徳な理念も注ぎ込んでいると言われている。<sup>41</sup> 尊徳の「分度」「推譲」思想は富者には余分の富を貧者に譲り、貧者には富者に頼らず独立独歩することを勧める。それは社会の貧富差別を段々減らせていき、社会を良好的な循環へ導いていくと言えよう。

もう一方、「推譲」は「分度」に基づく「推譲」である。「推譲」すれば、家産が維持できるし、増殖にもなる。<sup>42</sup> 経済的観点から見れば、「推譲」はまた貯金の一種と言える。この「貯金」は、自分と子孫のためのみならず、他人と国のためでもある。従って、尊徳の「推譲」は社会性をもつものであり、この「貯金」も社会性的な「貯金」になる。

#### 5) 方法論が異なる

尊徳は他人、村、国家の富裕を考える同時に、個人の基本的な生活も無視しないのである。従って、尊徳が合理的に現実から出発する志向が判明である。これに対して、幽学が共同連帯の精神の育成を主張し、農民の集団化により農村を復興しようとする志向が強かった。幽学の考えでは、一家の復興をはかるには、まず一村の復興からはからねば、一家の復興も成し遂げ難いというのである。ここに至り、尊徳と幽学は当時の荒村復興の実践に対する方法論の違いが分かる。

### 四 むすび

以上、尊徳と幽学の主な思想を比較してきた。総じて言えば、尊徳は幽学と同じく、「分を安んじ、度をわきまえる」と強調しているように見えるが、幽学は儒家の「天人合一」思想を固守し、主に武士の立場から、道徳的な角度から考えたのに対し、尊徳は「天道」と「人道」とを分けて考え、自然の客観性を主張する同時に、人間の主観的能動性をも強調した。尊徳は現実から、道徳規範と経済利益とは調和できるものであり、根本的には一致しているものであると考えている。このような相違が生じたのは、幽学と尊徳との立場は始終違うことによるのであろう。つまり、尊徳はあくまで農民の立場から農民のために、ものを考えていた。

尊徳と幽学の思想は、どちらも農民を勤儉に導くには有効であるが、尊徳の「勤」は「推譲」と結び付き、その「勤」の最高的な目標は「推譲」への達成の為である。そして、自分のみならず、他人、社会のためにもなるのである。従って、尊徳思想の社会公益性、社会協調性の特徴が強いと言えよう。また、尊徳の「分度」「推譲」は道徳面のみならず経済面にも係わる。それは一種の経済倫理学でもあり、経済哲学でもある。尊徳は経済と道徳との調和を主張し、「推譲」を提唱している同時に、自分の基本生活を破壊しないように工夫することも強調している。尊徳は人間の実際の需要から出発し、人間の正当な需要と欲望を認めている。彼の思想は人間の自然発展に合う。幽学の強調している「孝行」と「家永続」は現在でも意義のあるものであるが、幽学は徹底的に禁欲を主張し、封建身分制を強調しすぎたため、結局は封建武士的倫理の枠から出ることができなかったのである。従って、幽学は尊徳と比べ、尊徳のほうがより前向きのであるといえよう。

尊徳と幽学との比較研究に関しては、思想史、教育、実践などの面で、検討すべき内容が多

くあるが、これらの分析はさらに他の機会に譲りたい。

## 注釈

- 1 家永三郎『日本道徳思想史』岩波書店、1977年（改版第1刷）、225頁。
- 2 同上。
- 3 古田光・子安宣邦編『日本思想史読本』東洋経済新報社、2000年（第16刷）、156-157頁。
- 4 子安宣邦監修『日本思想史辞典』ペリカン社、2002年、418頁。
- 5 奈良本辰也『二宮尊徳』岩波書店、1959年、11頁。
- 6 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974年、20頁。
- 7 古川哲史・石田一郎編『日本思想史講座 5 近世の思想』雄山閣、1975年、231頁。
- 8 下程勇吉『二宮尊徳の人間学的研究』広池学園事業部、1965年。
- 9 吉地昌一編纂『解説二宮尊徳翁全集』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年。
- 10 木村礎『近世の村』教育社、1980年、209-212頁。
- 11 『開発学研究』12(1)に掲載、日本国際地域開発学会、2001年。
- 12 『経済集志』44に掲載、日本大学経済学研究会、1974年。
- 13 『商学集志』65(2)に掲載、日本大学商学研究会、1995年。
- 14 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 生活原理篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、267頁。
- 15 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 訓話傳記篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、444-445頁。
- 16 奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳・大原幽学（日本思想大系52）』岩波書店、1973年、123頁。
- 17 同上書、125頁。
- 18 同上書、123頁。
- 19 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 生活原理篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、309-310頁。
- 20 奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳・大原幽学（日本思想大系52）』岩波書店、1973年、166-167頁。
- 21 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 生活原理篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、522頁。
- 22 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 訓話傳記篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、414頁。
- 23 同上書、411頁。
- 24 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 生活原理篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、516頁。
- 25 奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳・大原幽学（日本思想大系52）』岩波書店、1973年、289頁。
- 26 同上書、252頁。
- 27 同上書、262頁。
- 28 同上書、260頁。
- 29 同上書、265頁。
- 30 同上。
- 31 同上書、313頁。
- 32 同上書、246頁。
- 33 同上書、254頁。
- 34 同上書、123頁。
- 35 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 生活原理篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、141頁。
- 36 同上。
- 37 奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳・大原幽学（日本思想大系52）』岩波書店、1973年、227頁。
- 38 吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 訓話傳記篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年、308頁。
- 39 同上書、427頁。
- 40 奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳・大原幽学（日本思想大系52）』岩波書店、1973年、166頁。
- 41 刘金才「二宮尊徳及其報徳思想」『日本学刊』（2）に掲載、2005年、158頁。
- 42 奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳・大原幽学（日本思想大系52）』岩波書店、1973年、194頁。

## 参考文献

- 1、奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳・大原幽学（日本思想大系52）』岩波書店、1973年
- 2、下程勇吉・九木幸男編『世界教育宝典日本教育編 二宮尊徳・大原幽学集』玉川大学出版部、1966年
- 3、吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 逸話雑録篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年
- 4、吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 訓話傳記篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年
- 5、吉地昌一編纂『解説 二宮尊徳翁全集 生活原理篇』二宮尊徳翁全集刊行会、1937年
- 6、奈良本辰也『日本近世の思想と文化』岩波書店、1978年
- 7、家永三郎『日本道德思想史』岩波書店、1977年（改版第1刷）
- 8、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974年
- 9、下程勇吉『二宮尊徳の人間学的研究』広池学園事業部、1965年
- 10、木村礎『近世の村』教育社、1980年
- 11、古田 光・子安宣邦編『日本思想史読本』東洋経済新報社、1979年
- 12、子安宣邦監修『日本思想史辞典』ペリカン社、2001年
- 13、網沢満昭『日本の農本主義』紀伊国屋書店、1971年
- 14、佐々井信太郎『二宮尊徳研究』岩波書店、1927年
- 15、中村雄二郎編『思想史の方法と課題』東京大学出版会、1973年
- 16、中井信彦『大原幽学』吉川弘文館、1963年
- 17、千葉県教育会館維持財団『大原幽学全集』千葉県郷土資料刊行会、1942年
- 18、錦田恵吉『大原幽学選集』読書新報社出版部、1940年
- 19、芳賀登監修『日本道德教育叢書 第1巻』日本図書センター、2001年
- 20、劉金才・草山昭編『二宮尊徳思想論叢』北京学苑出版社、2003年
- 21、愈慰慈・斎藤清一郎編『報徳学創刊号』国際二宮尊徳思想学会、2004年

## 論文

- 1、土屋重隆「二宮尊徳と大原幽学」（日本大学経済学部創設70周年記念論文集）『経済集志』日本大学経済学研究会、1974年
- 2、門間敏幸「日本における農村貧困克服の先駆的試み 世界に誇れる大原幽学・二宮尊徳の挑戦」『開発学研究』12(1)、日本国際地域開発学会、2001年
- 3、森静朗「アジア的信用組合の成立——大原幽学と二宮尊徳」『商学集志』65(2)、日本大学商学研究会、1995年
- 4、筑波常治「大蔵永常と二宮尊徳 幕末の進歩的農学者・永常の思想を尊徳・信淵・幽学との対比から再評価する」『思想の科学』第35号、思想の科学社、1961年
- 5、奈良本辰也「「二宮尊徳」をどのように受けとめるか」『理想』（通号268）、理想社、1955年
- 6、小林英一「大原幽学論」『思想』（407）、岩波書店、1958年
- 7、柴田武雄「大原幽学への視角」『千葉敬愛短期大学紀要』敬愛大学・千葉敬愛短期大学、1984年
- 8、久木幸男「社会教育家としての大原幽学」『仏教大学研究紀要』（通号48）、仏教大学学会、1965年
- 9、針生清人「大原幽学の思想と実践」『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』（通号20）、アジア・アフリカ文化研究所、1985年
- 10、柴田武雄「大原幽学をめぐる諸問題について」『千葉敬愛短期大学紀要』敬愛大学・千葉敬愛短期大学、1979年
- 11、劉金才「日本近世倫理思想史における尊徳思想の位置づけについて——「分度倫理」と「増殖倫理」への再分析を通して——」『二宮尊徳思想論叢』学苑出版社、2003年
- 12、劉金才「二宮尊徳及其報徳思想」『日本学刊』（2）、2005年。

（原稿受理 2009年3月16日）